北海道文学風土記

木野　工

小説というものは、常識的に言いますと、生活していくうちに自然とたまってくる心の澱み、つまり思想とか哲学、もう少し解釈の幅を広げると、身辺にある情緒とか、もっと広げると、政治とか経済とかに営まれる無形の心象的なものを、人物とか風景とか、事件という名で呼ばれるものの形を借りて表現しようという、いわば一つの言論の発表の形式だと思います。

私も新聞記者として暮らしているうちに、自分の心の中に澱んでくる世の中に対する怒りとか、日本の経済機構に対する憤りなどを自分のもっている素材の中で人々に訴えたい、そういう意図で自分の中にたまってくるものを小説の形で書いてきたという事になると思います。

私は北大の出身で、まだ理工科系の学部だけしかない頃の学生です。その頃本州の人々は北海道に対して、現在以上の憧れを持っていました。

そういう憧れに価するだけの雰囲気が、私の学んだ当時の北大には確かにありました。例えば、五月の初めになって、窓の外の大きな楡の木に初めてカッコーが鳴く。五月というのは北海道にとっては、いろいろな花がいっぺんに咲き立つ大変美しい季節で、誰かが〝あっ、カッコーが鳴いた〟というその一言が、今日は教室の中でつまらん講義を聞いているよりは、外へ行って芝生に寝ころがって歌でもうたおうではないか、という合図の言葉になって、窓から飛びだす。ヘルマン・ヘッカーというドイツ語教師がおりまして、たまたまそのカッコーが鳴いた日の記憶を非常に鮮明に持っておりますが、そのヘッカーさんは、当時すでに六〇才になんなんとしておりましたが、教授室からギターを持ち出して芝生に出て、ドイツ語で「野バラ」を歌ったりして、まわりの教室からもどんどん参加して、予科の校舎中が講義をやめて、カッコーの声に聞きほれるというような、そういう雰囲気がありました。大変ロマンチックな雰囲気、というより何か自由闊達な雰囲気が学校の中にありました。

そういう雰囲気が、札幌農学校の伝統、キリスト教の伝統と結びついていろんな形で残っておりました。農学校以来の "Boys, be ambitious!" という言葉が、くよくよするな、という俗っぽい言葉で皆の中に浸透していました。どの学生の下宿へ行っても、本棚には自分の専攻する理工科系の書物は、ほんの片隅に何冊か置いて

あるだけで、皆が読んでいるものは、ほとんどが文学と哲学の書物です。私たちの時代はすべての学生が恐らく一回は小説を書いているだろうと思います。

小説というものを書きだしてから、私は北海道の自然とか開拓の道程、そういうものに多少の大人らしい目を開かれました。北海道を書いた文学作品、北海道の寒さとか雪に対する非常に正確な描写などはいくらでもあります。例えば、日本のドン・キホーテといわれる岩野泡鳴という作家がいます。樺太へ蟹をとりに行って失敗、しょうがなくて北海道をうろつきながら、原稿を書いて食を得ていたという、その人が「放浪」という小説を書いています。これは大変な大作で、第一部「放浪」、第二部「憑き物」、第三部「断橋」という作品ですが、北海道の雪とか吹雪とか、寒気、北海道の表現でこれを「しばれ」といいますが、そのしばれの具合を実に刻明に書いております。刻明に書いてはいるけれども、これは南国の人が見た北海道の寒さです。私はよく自分の作品の中に白い闇という言葉を使いますが、光線の、光の量としてはふんだんに光があるのに何も見えない、つまり闇という雪の広野の風景、そういう感じがちっともでていないのです。

昨今は、北海道を歌っている流行歌が非常に多い。北海道の雪に関する描写は至る所に出てきますが、私どもが見るとこれも明らかに北海道の雪ではない。

それで私はそういう事が文学の一つの目標たり得るかどうかは別にして、何とかして北海道の雪の悽惨さ、物凄さ、惨めさというようなものを人々に伝え、訴えたいと考えて、いくつかの短い作品を書きました。最初に書いたのが「雪国」という短篇ですが、これは幸いにも三笠書房という所で、島崎藤村が創刊して以来ずっと続いていた「文庫」という雑誌の賞のようなものに選ばれて、学生時代に金二〇円也の賞金をもらいました。これが実は小説という大変恐ろしく、しかも深い淵の中に踏み込んだ機縁でした。

雪の描写に力を入れると、雪が、自然が、北海道ではいかに人間をさいなみ、いかに人間がそれに対抗して、立向って暮らしをたてているか、という所へどうしても発想は動いていきます。そういうことからロマンチックな雪の風景を描くという域を越えて、雪に戦いを挑む、寒さに戦いを挑む人間の生活、それこそ北海道の人々が日本の政治、経済に訴え出なければならない一つの要素ではないかという具合に進展して行きます。

北海道から出ている作家のほとんどが、また文学史上に残るであろうと思われるような北海道を描いた優れた作品は、すべてそういう所から人々の生活を描いたものだと思います。思いつくままそのような作家と作品の名前をあげてみます。

北海道を描く時に、北海道へ来て北海道を眺めて北海道を書いた訪問作家群と、北海道の中で北海道の風土に育てられどうしてもそうしないではいられないで書き出した作家と、まず大きく二つに分けられます。前者にも、流れ者の放浪型、破滅型の作家と、ブラリときた物見遊山型とでも言うべき作家と、非常にまじめに北海道に取材に来て作品をものした作家と、三つに分けられます。

流れ者というと語弊がありますが、破滅型の作家で最も代表的なのは、石川啄木だと思います。それから、日本の私小説の作家の中では最も優れた作家の一人であろうと思われる葛西善蔵。彼は北海道に職を求めて、人力車夫をしたり、土工をしたり労働をしながら

三度もきて北海道の事を多少は書いています。それからさきほどの岩野泡鳴。

まじめな取材型の作家としては、新しい方では、例えば武田泰淳「サイロのほとりにて」という良い作品があります。サイロはロマンチックに見えますが、そのサイロを『荒々しい北海道の自然に挑むために設けられた望楼のように私には見えた』という書き出しで始まる、非常に気味の悪い殺人事件を扱った作品です。また有名な「森と湖のまつり」というアイヌの独立運動をからませた長編があります。この書評に私は『北海道に森という言葉はない』と書きました。私どもが「森」という言葉から受けるふんわりとした暖かな人間の暮らしをそっと包んで守ってくれる、やわらかい感じの木立というものは北海道にはどうもないような気がするのです。すぐれた長編の題に武田さんが「森」という言葉をお使いになったのがどうも私は気になるのです。北海道をまだよくおわかりになっていないのではないかというような事を書きました。しかし武田泰淳という人はまじめな作家で、取材してアイヌの事を実によく書いています。私たち北海道に住んでいるものは、北海道には人種差別はほとんどなく、アイヌの人たちが普通に暮らしているような気がしますが、外からきた方が御覧になると、アイヌは差別を受けているということが非常に鮮烈に目に映るんだなと、文学的な価値よりも先にそういう感じをまず受けました。と同時に、アイヌのお祭りとかアイヌの青年とか、これにはたくさんの実在の人物がモデルで出てくるのですが、その人たちに対する武田泰淳の目が、実はやはり観光者の目であるなと感じさせたことも事実です。

どんなにまじめに取材しても、風土というものから離れた、作家的な意図をもって取材した作品というものには、真実と遊離した何かがつくり出されてくる。創作されていくという意味ではなくて、ことさらに作り上げられていく、でっちあげられていく、そういう作用が起こるのだという事をしみじみと感じました。

そのほか、まじめな作家の一人に戸川幸夫さん。この人は昔は毎日新聞の記者で、作家というよりはむしろ動物学者に近いほど動物に精通していますが、この方が北海道をたくさん書いています。それから近頃の、大変な売れっ子の一人、吉村昭さんもせっせと北海道に取材にきて書いています。佐藤春夫さんにもいい作品があります。私どもの新聞に「北海道吟行」という作品を十二回連載、その後に「わが北海道」、新潮社から立派な本で出ていますが、長いものです。さすがに優れた文学者だけあって、すばらしい文章で、すばらしい目で北海道を御覧になってはいらっしゃるけれども、どうも北海道をまともに描いているという感じからは、ちょっと遠い気がするのです。つい先日なくなった志賀直哉さんも北海道に見えています。戦前にも短いもので「網走まで」という非常に優れた紀行風の短篇を残されています。そんなふうにまじめな取材型の人がいます。

北海道出身の作家群を、やはりタイプによっていくつかに分けてみますと、例外なく、ある意味では革新的な作家ということになってしまうので、その革新をどんな方向から志したかということで、いくつかのグループに分けてみますと、宗教的な方面から革新を志向した作家たち、思想的な革新を志向した作家たち、それから北海道の自然の美しさと言いますか、風土の人間に与えるやさしさを素材にしてロマンチックに革新をめざした作家たち、あえて分けると

三つぐらいに分けられると思います。

その代表的な人々をあげると、宗教的革新を志向した人たちは、必ずしも小説家ばかりではありませんが、まず頂点に立つのがこれは何と言っても例のクラークです。私の学校の大先輩で神様のような人ですが、本当のことを言うと、アメリカではあまりたいした人物ではなかったらしいというのが近頃の評価です。しかし、少なくとも北大にいた時には大変かっこ良かった。儒教的な秩序と教養に支えられた我々日本人に、西欧風な、真理探究のためのまともな態度を教えた貴重な人物です。歴史を教える時に、学生に大きなのこぎりを持たせて原始林の中に入り大木を切らせる。札幌のしかも北大の構内に近いような所に、五百年も六百年もたった木がいくらでもあったわけで、その木を切らせて学生に年輪を勘定させる。例えば、この木の年輪のこの時にはこういう事があったんだぞ、その線は平安朝の末期、これは何々の時代でこういう戦いがおこった年。それからもう少したって、この辺の所で徳川幕府が始まっているんだという教え方をしました。植物学の話をする時には――クラークは植物にも歴史にもそんなに詳しかったかたいへん疑問ですし、恐らく演出が非常に上手だったのだろうと思いますが――樹木の高い所に宿木とかキノコとかが生えているのを見つけると、あれを取れと命ずる。そういう時にクラークは躊躇せず四つん這いになって、ここへ上ってあのキノコを取れと指示する。当時「学校」に籍をおけるような学生はかなりの上流家庭の人が多かったわけで、特に儒教的な教育を厳しくうけていただろうと思います。誰も進んで先生の背中に足を上げるものはない。しかし、真理探究の前には礼儀とか作法とか、つまらぬ道徳などは一顧の価値もないものだ、背中に上ってキノコを取って来いと言って取らせた。そしてわずか九か月しかいないで札幌を去る時に、馬の蹄をパカパカとさせながら、"Boys, be ambitious!" などと言って、大変かっこいいわけです。

その新しい教育をうけた人々の中から、内村鑑三、新戸辺稲造という有名な二人の思想家が出ました。その同期に、北大の学長を四十年間も勤めた佐藤昌介さんがおられた。この佐藤昌介の影響を、私どもは恐らく自分では意識していないながら、一番うけているのではないかと思いますが、そういうすぐれた人物が各界に出ています。

そういう人々の流れをくんだ人では、北海道出身ではないのですが、貴族の生まれで、明治二八年頃の学生有島武郎は、いわば準北海道出身とみて、この流れをくむ人々の代表的な作家の一人に挙げます。ずっと下って現在、例えば三浦綾子さんにまで、その流れは及んでいると思います。

もう一つのグループの、思想的革新を志向した作家群の中で、一番印象的なのはやはり小林多喜二です。多喜二の生まれたのは実は秋田かどこかで、まだ乳呑児の頃に小樽にやって来て、南小樽の海に臨んだ崖の上の堀立て小屋で、道路工事をしていた人夫に物売りをしてやっと暮らしをたてていたという貧乏な家に育ちました。多喜二は実に素直でまじめで、あのように激しい思想を内に抱いて作品を書き続け、時の権力に抵抗して非業の死を遂げるようになるなどとはとても見えない、実におとなしい頭の良い少年であったようです。小樽高商に学び、銀行に就職しましたが、多喜二には少しもマルキシストとしての激しさとか、実践運動のあとが見られないまじめな行員だったとの記録が残っています。しかし、あの美しい風

景の中で育ちながら、彼の心の中に育っていたものは、北海道の自然に力を加える、我々がいかんともしがたいような大きな権力、自然を拓き、守り、それを美しいと見させる作業を行なうために、実に多くの人々が権力の手に叩きつぶされて貧困の中に死んでいった、そういう悲惨な印象だけで、それが彼の中にだんだんと積み重ねられていったのだと思います。

それから多喜二に次いで激しいものを書いたのは、本庄陸男で、「石狩川」という力作が有名です。この石狩川は北海道の人にとっては美しい川というよりは、魔性の川というほどの大変な川で、それが「石狩川」の中には実にすばらしく描かれています。しかしこの作品が、恐らく文学史上に永久に残るであろうと思われるのは、実はそういう自然に虐げられながら人間が原野を拓き、自分の力で自然に抗しながら新生活を切開いていったという、人間の意志の強さが人の心をうつのだと思います。しかも、石狩川の美しさ、すばらしさも十分に描かれています。

伊藤整の中にも北海道の自然を描いたものがたくさんありますが一風変っています。小樽で育った彼の目には、美しい小樽がまるで化け物のように見えたのです。その様がまず「幽鬼の街」という作品になって現われました。その前に「馬喰の果て」という作品があります。これも小樽の町を描いています。自然の中からたったいま創り出されたような荒々しい、感情も備えていないような男たちという表現がよく出てきます。十年ほど間をおいて「幽鬼の村」という、やはり同じ主題の作品があります。その中に出てくる小樽の町は、気味の悪い、北海道の自然の中に何となく亡霊のように浮かび上ってくるという印象で出てきます。小樽の町を何故このように発展させ、何故このような形の町作りをさせ、何故人々の生活をこのように変えてしまったのかという疑問を読みとれるという作品です。そういう意味で伊藤整も、思想的革新を志向した作家群の中に入れてもいいのではないかと思います。

それから西野辰吉さん。旭川の出身で、有名な作品に「秩父困民党」があります。北海道の事を書いているのではありませんが、北海道の作家群にどうしてもいれなければならない非常に優れた作家だと思います。それから絢爛たる光をあびて世の中に出た人の中に島木健作。それから皆さんの中には芝居を御覧になったり、作品をお読みになった方もおられるだろうと思う久保栄。昭和三三年に東京の病院で自殺と言われる死に方をしました。五十七才でした。現役では船山馨さん。「石狩平野」は余りにも有名です　「お登勢」も凄い人気です。

この作家群にどうしても入れなければならない有名な詩人が二人います。一人は小熊秀雄という左翼の詩人です。この人の研究が近頃急に盛んになりました。記憶にとどめておいていい詩人です。それから今野大力という詩人もおります。

もう一つのグループに属する最も代表的な作家は原田康子さん。「挽歌」の中に、北海道の中ではあまり描かれていない釧路原野の風景が、実にすばらしく描かれています。三つのグループにはっきり分けてしまうことは困難でしょうけれども、あえて分ければこのように分けられます。

北海道の文学は誤解されていると思います。北海道の観光ポスターに現われてくるような「新しい天地」「広大な原野」「神秘の湖と原始林の深い緑」そういう言葉で眩惑されているきらいがあると思

います。北海道で育った我々にしますと、北海道という所はいつでも、真夏の太陽の下にさえも何か非常に暗鬱な人間の暮らしがある。人々は常に心の中に何か怒りをたたえている。その怒りがどんな性質のものであるかを意識はしないけれども、権力に対する抵抗のようなものを人々全部が常に持っている。忍の一字で生きる、それが生活の知恵であり技術である、そういう暮らし方を私たちはしている、という点が強く描かれているはずです。

北海道人の心は決して明るい空の下に開かれているのではなくていつも暗くとざされている。そういう印象をぬぐい去ることはできません。だから北海道人の書いた北海道の文章は例外なくといっていいほど暗いのです。そのことを、北海道の風土が北海道人の書いた文学に現われているといえば大変飛躍しますが、北海道人の文学には、自然や権力に対する抵抗、その抵抗の中から生れてくる自分の力の弱さに対するたえがたい憤りが潜んでいると思うのです。そんなことを意識しながら読んでいただければ、私がこんな話をしたことも多少は役に立つのではないかと思います。

（立正文芸学会での講演より筆記・伊藤典子）

研究余滴Ⅰ〈平資盛家歌合(1)〉

収穫などほとんど期待しない方がよい訪書旅行でも、たまには小さな新資料にめぐりあえる場合もある。

島原市立図書館松平文庫蔵の『（文治六年兼実女任子）入内屏風和歌』は、「十月・千鳥」の宮内卿季経の歌

かせわたるとしまかいそのむら千とり
たちゐはなみのこころなりけり

に、群書類従本の本文にはない次のような左注が記されている。

寿永三年頭中将資盛朝臣家歌合、季経卿「風さゆるとしまかいそのしき波にたちゐいとなき友千とりかな」、季能卿「風吹は波こす磯のさよ千とり心ならすや立居鳴らん」以二自他両首一出来之歌也。又一つ憎も覚歌也（句読点等稿者）。

「入内屏風和歌」そのものの伝本が少いことも問題だし、この一ケ所だけにしかない左注を誰が記したかも吟味を要する（批判的な記述からすると御子左側の人物であろうか）が、注目すべきは「平資盛家歌合（散佚）」の記事が見られることで、萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』の集成（四三五）に無い季経・季能の歌が知られ、「千鳥」が題に加えられ、成立が寿永元（三は誤写か）年と推定されることなど、興深い手がかりが見出されたといってよいであろう。

（松野陽一）